

4. 東京大学スキー山岳部 ー山の厳しさと愛しさを知るー

松高を卒業後、東京帝国大学法学部に進学します。当然のようにスキー山岳部に入部し、国内各地の峻峰を登りました。

1948年の南アルプス赤石岳の冬季合宿では部員が遭難死し、小谷自身も命の危機を感じるような体験をします。このことは、後の海外の高峰遠征において、安全を第一として、無理をしない登山をめざすキッカケになりました。



ここに注目！

「アルペストリアン 第6、7、8号」

森本次男の依頼で母校の後身校の山岳部部報に、英国登山家のF.Sスマイスの著した『THE ADVENTURES OF A MOUNTAINEER』（「一登山者の冒険」）の翻訳を掲載した。この本では登山の意義や心構えを説いており、小谷の愛読書であった。森本次男らが培った「北山スクール」の後輩たちに送るエールでもある。

第7号では自身の随筆「ある秋の単独行」を掲載している。登山家であり、著述家でもあるスマイスと小谷の文筆活動の姿が重なる作品である。

「日記」、「山日記」

1946年～1949年及び1951年～1953年までの山行記録までの山行記録。赤石岳冬季合宿についても時間まで詳細に記している。のちの海外遠征時でもこのような詳細な記録を付けている。



涸沢合宿 1949年8月3日～4日
恩師森本先生と滝谷を登攀



前穂高岳山頂にて一服

1947年4月～1950年3月 東京大学法学部に在籍



安田講堂前



下宿にて勉強中



前穂高岳 3,090m 北尾根 (1949年撮影)
写真(小谷隆一アルバムより) 小谷達雄氏 蔵

— 山の厳しさと愛しさを知る —

赤石岳冬季合宿 (1948年12月20日～1949年1月5日)

総員17名

OB5名、部員7名、松本高校1名、静岡高校2名

赤石岳アタック隊 … 深沢 を含め4名

聖岳アタック隊 … 小谷 ほか3名

12月29日 部員深沢の遭難(赤石岳直下の凍結斜面で滑落死)



1948年12月29日(快晴) 聖兔のコル付近より聖岳遠望

29日は快晴に恵まれ、午後から聖岳に向けて出発。兔岳と聖岳の鞍部に第4キャンプを設けて泊まった。

翌早朝に遭難の連絡隊が到着し、全員直ちに引き返して遺体収容の対応にあたることとなった。

元旦からは猛吹雪に襲われる。第3キャンプのテントが飛ばされ、過酷なビバークを余儀なくされた。このとき、小谷自身も生命の危機を感じたと記している。

1949年5月22日から29日に赤石岳遺体収容行(一次)に参加
25日から27日に百間洞の小屋に入って終了作業を行うが、積雪多量の為、(作業続行)不可能であった。再び後日に残して下山する。
赤石岳遺体収容行(二次)は7月であった。(小谷は不参加)

『部内雑誌』 1945-52 記事より抜粋要約

『山なみ帖』より

冬山の帰途

二十日間の冬山合宿を終えた私は友人達と別れ、ただ一人淋しい夜の小駅から汽車に乗り込んだ。車内に入ると電燈の光が目にもぶしく輝き、臭い酒気が鼻をつく。月日の観念が失なわれてしまう冬山生活を送っている間に、都会にはもう新しい年がやってきたのだ。乗客の服装も正月らしい華やかな色に彩られている。

私は車内の一隅に空席を見つけ、棚の上にはのりそうもない大きなルックザックを座席の横におき、ピッケルを前にたてて腰をおろした。乗客の大半は快さそうに眠っている。大きく揺れて動き出した列車がやがて一つ調子の音をたて始めると、私も漸くくつろぎを覚えることができ、不幸だった冬山の生活の想いが脳裏に蘇ってくる。

(中略)

私達は冬山の敗亡者だった。登頂寸前にA岳直下で岳友Fは墜死し、しかもその直後激しい吹雪が数日間続き、Sと二人でとどまっていた前進キャンプのテントは烈風のために破壊されてしまった。難を避けて雪洞をつくったが、これも吹雪のためにこわされ私自身死地に追いこまれたのだった。

Fの笑顔が大きく浮んでくる。どうしてスリップしたのだ、と空しい問いをFの笑顔に向って口ずさむ。しかし、Fの顔はいつものように微笑しているばかりだ。装備の不充分、技術の未熟等パーティとしての責任が次から次へと数えられて私を責めるが、Fは既にA岳の山腹に新雪に抱かれて眠っている。取返しのない厳然とした事実なのだ。

(中略)

故郷の雪の北山が私の真正面にほのかにながめられるようになってきた。身体の疲労が回復したら北山へスキーに出かけよう。〈僕はまた山に登り続けるよ〉と、瞼を離れないFの顔にささやくと、Fは相変らずの微笑をもって答えた。私はFに心からの合掌を捧げた。

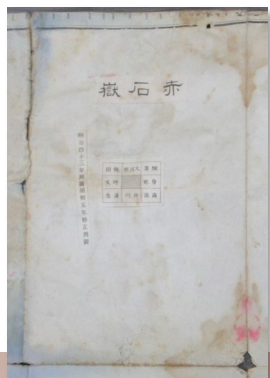
(後略)

(一九五〇・二)

部員深沢遭難(1948年)をモチーフとした作品
『山なみ帖』『冬山の帰途』 1950.2

国土地理院 五万分の一地形図 「赤石嶽」

(小谷コレクション)



明治四十三年測図
昭和五年修正測図

実際に使用した地図

猛吹雪に遭う等の為、他の山行の地図に比べて汚損が著しい。

ルート及び△CⅠ、△CⅡ、△CⅢ (2500m附近) の各キャンプ地が赤ペンで書き込まれている。

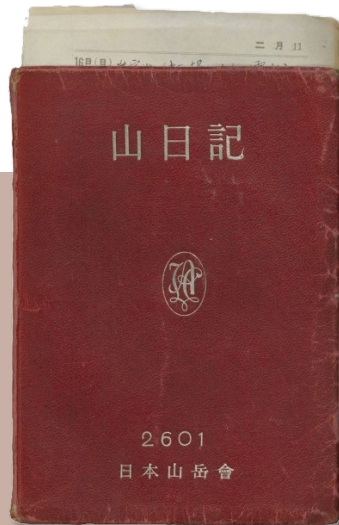
このルートは南アルプスの核心部に最短時間で到達するために、新しく開拓したものの。



展示資料No.21

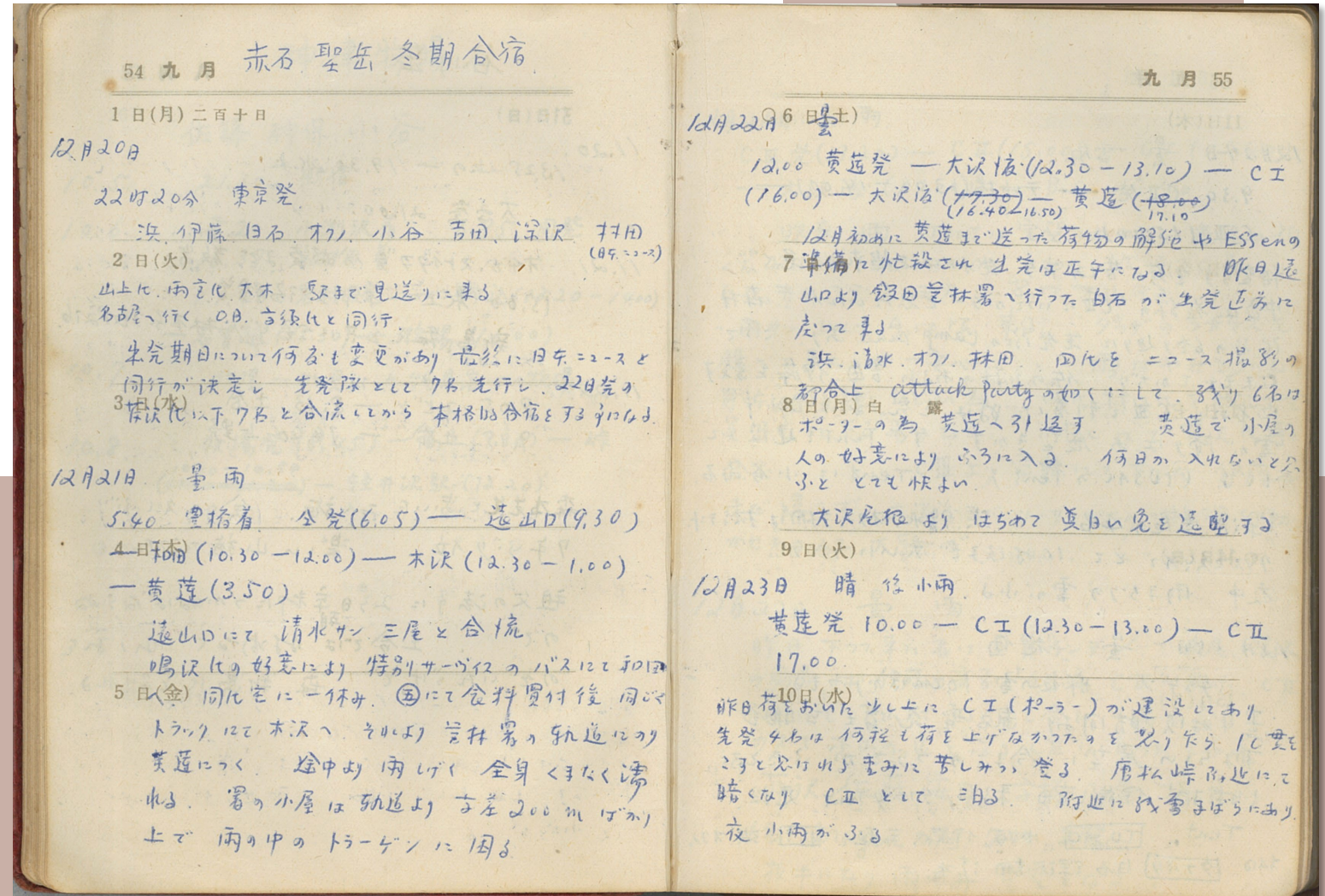
『山日記』

2601
日本山岳会
三省堂
1940年12月発行
小谷達雄氏 蔵



第二商業学校時に購入、使用していた山日記に1946年～1949年までの山行記録を追記している。

特に、赤石聖岳冬期合宿は克明に記述されている。



展示資料No. 22

『THE ADVENTURES OF A MOUNTAINEER』

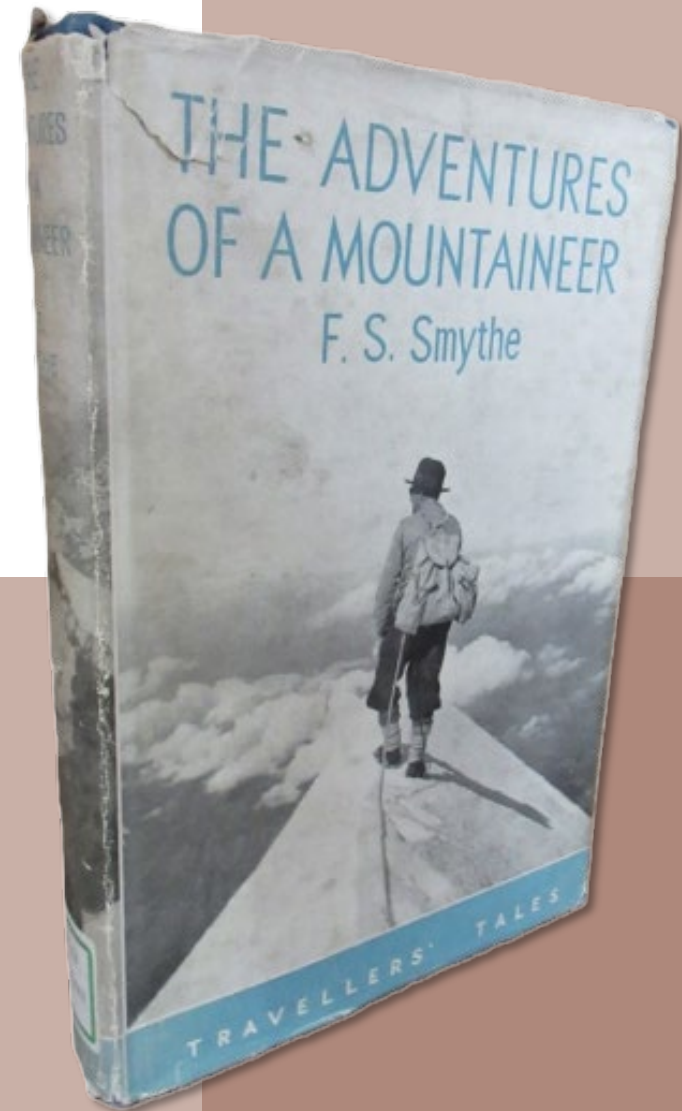
F.S.Smythe
J.M.Dent 1940

(小谷コレクション)

このような私が登山の意義を考える時に、まず思い出すのは高校時代に読んだF. スマイスの『一登山家の冒険』という書物の一節である。スマイスは登山の意義、或いは価値づけを三つあげている。第一に登山は何にもかえがたい友情を得させてくれる、第二に大自然の中で行う運動であるための効果、第三に人間の本能である冒険心を満足させてくれるものであると。

『山なみ帖』 「登山とは」(1966.7) より

※『山なみ帖』では「登山家」、小谷訳文では「登山者」と記載されている。



展示資料No. 23

大学ノート

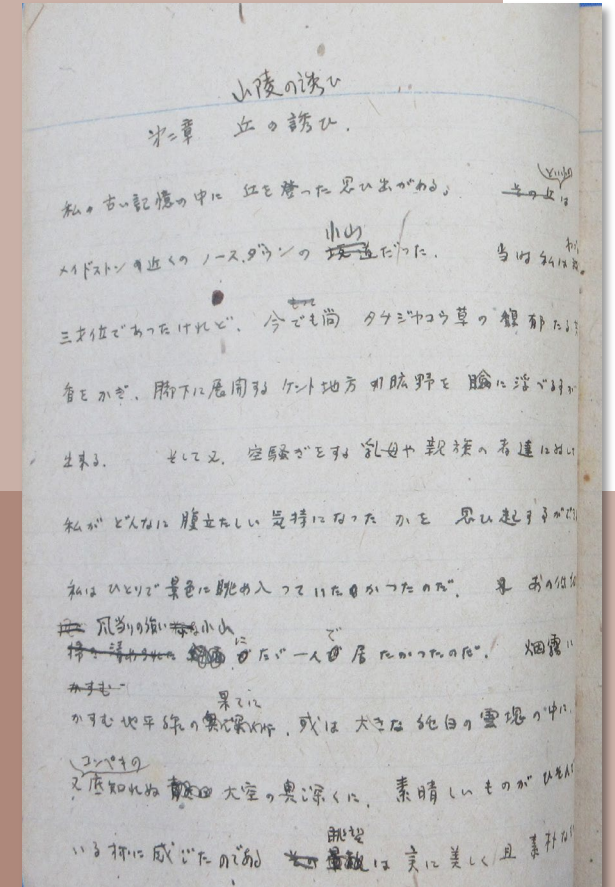
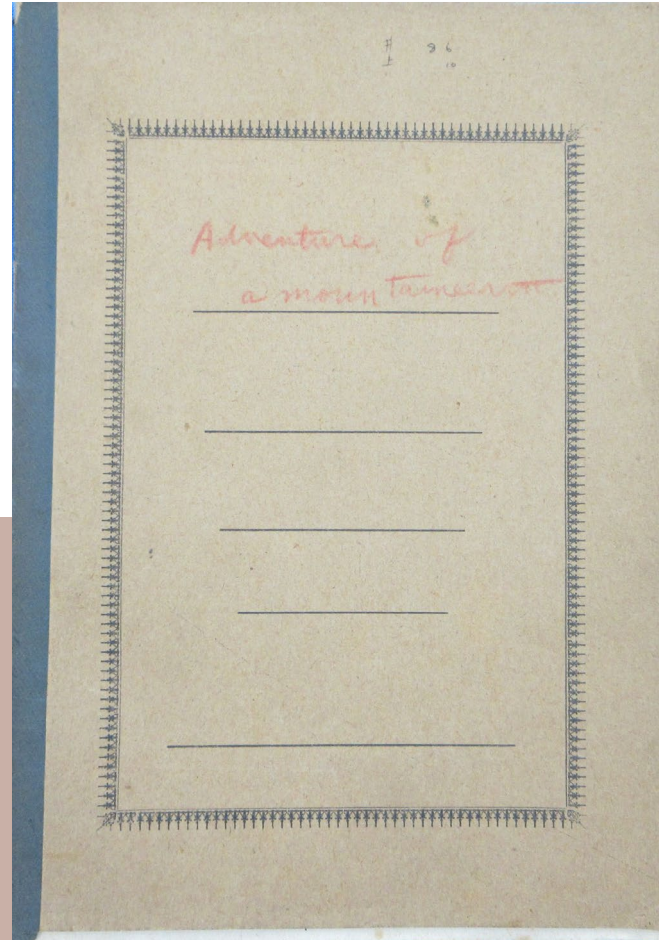
「Adventures of a Mountaineer」

同書の翻訳原稿

1948年

(小谷コレクション)

東京大学法学部時代の講義ノート(民法)であったが、途中から『The Adventures of A Mountaineer』Smythe著の翻訳ノートになっている。第2章から第4章までが訳されている。



山稜の誘い
第二章 丘の誘い
の頁

展示資料No. 24

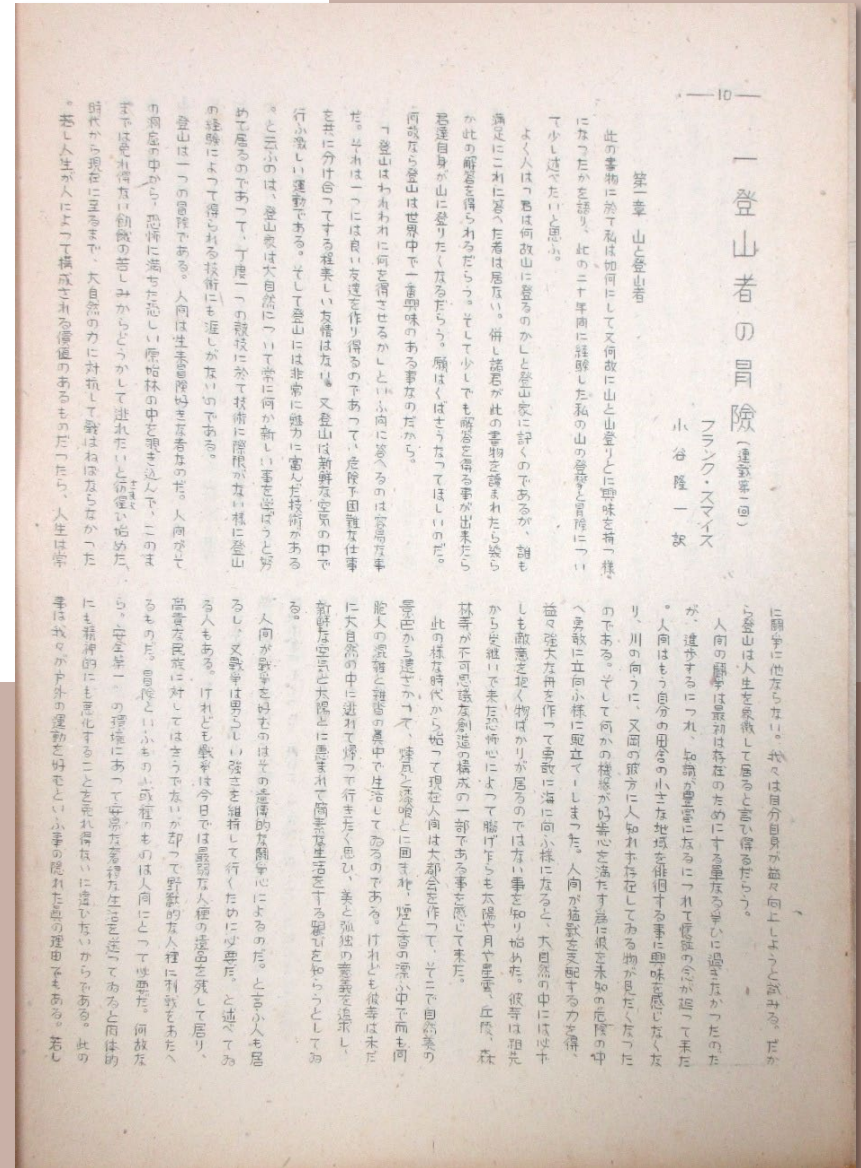
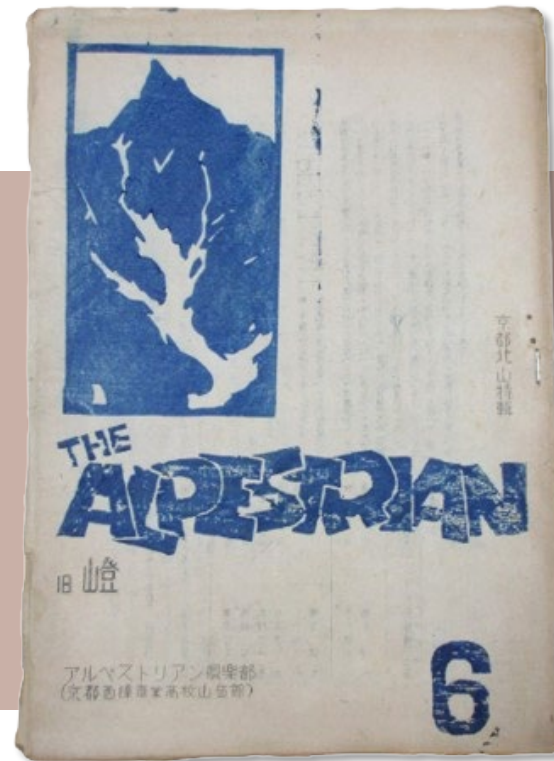
ざ あるぺすととりあん きゅう やまみち だいろくごう
THE ALPESTRIAN 旧 嶺』第6號

アルペストリアン倶楽部(京都西陣商業高校山岳部)
1948(昭和23)年8月30日刊

(小谷コレクション)

京都西陣商業高校(旧京都市立第二商業学校)の山岳部会報、山岳部顧問は森本次男

収録されている「一登山者の冒険」は二商の恩師である森本次男が連載読み物として小谷に掲載を依頼した。



「一登山者の冒険」 フランク・スマイス著 小谷隆一訳

母校である京都西陣商業高校登山部の会報「アルペストリアン」に掲載された「THE ADVENTURERS OF A MOUNTAINEER」の翻訳

一 登山者の冒険（連載第一回）

フランク・スマイス
小 谷 隆 一 訳

第一章 山と登山者

此の書物に於て私は如何にして又何故に山と山登りとに興味を持つ様になったかを語り、此の二十年間に経験した私の山の登攀と冒険について少し述べたいと思ふ。

よく人は「君はなぜ山に登るのか」と登山家に訊くのであるが、誰も満足にこれに答へた者は居ない。併し諸君が此の書物を読まれたら幾らか此の解答が得られるだらう。願はくばさうなつてほしいのだ。何故なら登山は世界中で一番興味のあることなのだから。

「登山は我々に何を得させるか」といふ問いに答へるのは容易な事だ。それは一つには良い友達を作り得るのであつて、危険で困難な仕事を共に分け合つてする程美しい友情はない。又登山は新鮮な空気の中で行ふ激しい運動である。そして登山には非常に魅力に富んだ技術がある。と云ふのは、登山家は大自然について常に何か新しい事を学ぼうと努めて居るのであつて、丁度一つの競技に於て技術に際限がない様に登山の経験によって得られる技術にも涯しがないのである。

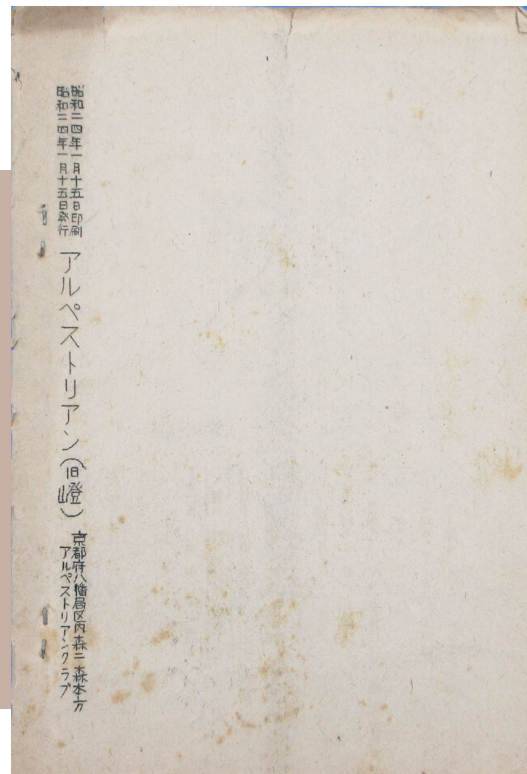
（後略）

ざ あるぺすとリアン 7 おおだいがはらとくしゅう
『THE ALPESTRIAN』 7 大台ヶ原特輯

アルペストリアンクラブ
1949(昭和24)年1月15日発行

(小谷コレクション)

京都西陣商業高校が廃校になったことから、「アルペストリアン」は山岳部会報ではなく、一般の会員誌として、森本次男によって続刊された。



『The Alpestrian』7 「ある秋の単独行」

35-38pに収録

『山なみ帖』に同名の掲載文がある。モチーフは同じであるが、
『山なみ帖』では、推敲・加筆され、より洗練された作品になっている。



ある秋の単独行

山へ私は登つて行かう
そこに小暗き樅の樹そびえ
小川はさくやき 小鳥はうたひ
雄々しい雲が み空をかける

ハイネの詩を口誦んで気軽に上高地を出て樹林の暗い谷から明るい尾根へと、もうすっかり枯葉で埋められた山径をたどって行つた。例年に比べると半月もおそい初霜の下りた晩秋の朝だった。私はひとりで西穂高の岩尾根にとりついた。飛騨側からは吹く烈しい尾根の風は雪の香りを含んで冬の近いことを囁いてゐた。手にふれる岩肌は新雪訪れを待ち受けてゐる様につめたくひえ切つてゐた。

単独行の感傷的淋しさを下の暗い谷間で拭ひ落して来た私は岩を攀ちて行くに従ひ次第に山の感覚の中へ融け込んで行つた。

すべてが孤独である。岩も草も這松も。そしてひとりで行く自分をも含めてこゝには孤独の世界が現出されてゐる。この世界の中に顔をつつこんである私は全く裸の人間だ。裸にされた人間は自然の絶対力の前には何一つ抗する術を持たない。絶対の力を持つ自然がその威力を用ゐたなら、裸の人間はその前に倒れ伏してしまはねばならないだらう。けれども各々の孤独の世界に於いてはじめて自己の真の姿見ることが出来、人間と自然との対決をなし得るのである。“孤独は山になく街にある”などといった哲学者はだれであつたらうか。

(後略)

小谷隆一

展示資料No. 26

ざ あるぺすとリアん だい8ごう
『THE ALPESTRIAN』 第8号

アルペストリアンクラブ
1949(昭和24)年9月30日刊

(小谷コレクション)

第8号に小谷隆一訳の「一登山者の冒険 II」が掲載されている。

